

宮崎県における縄文時代草創期研究の現状

宮崎市教育委員会 文化財課

秋成 雅博

目次

- 一 はじめに
- 二 宮崎県内の縄文章創期の調査・研究略史
- 三 現在までに検出されている遺構について
- 四 草創期土器の研究
- 五 草創期石器の研究
- 六 近年出土した注目すべき遺物
- 七 その他の調査・研究成果
- 八 おわりに

一 はじめに

宮崎県で初めて縄文時代草創期の遺跡の調査が行われて六〇年が経とうとしている。草創期の資料は特に平成に入ってからの大規模開発に伴う発掘調査等などによって増加が続いている。

南九州の初期縄文文化はその資料の多さから先進性と優位性が話題となる一方で、土器の系統の問題や比較材料の乏しさから列島他地域との時間的対比が困難であることが大きな課題となっていた。しかし、近年の調査においてはその課題を解消できるような成果が得られつつある。今回県内の資料集行い、宮崎県における草創期研究の現状を概観したい。

なお、草創期の時期範囲については異論が多いことを承知で土器の出現から岩本式までの時期を取り扱うこととする（註）。

二 宮崎県内の縄文草創期の調査・研究略史

多くの研究資料として注目されている宮崎市の堂地西遺跡・椎屋形第一遺跡などの発掘調査を境にしてその前後に一期ずつ設け、これまでの調査研究について三期に分けて紹介する。このうち一期・二期については岩永哲夫がまとめており（岩永一九九三・一九九七）、本稿ではそれを参考にさせていただいている。

① 第一期（昭和四〇年代）

本県での草創期の発掘調査は昭和三二年（一九五七）に行われた串間市大平遺跡に始まる。河口貞徳が行ったこの調査ではシラス直上のV層から隆帯文土器が出土している。

昭和四二年（一九六七）には南九州短期大学の鈴木重治が延岡市

北方町岩土原遺跡の発掘調査を行い、その第二文化層から隆帯文土器と半船底形細石刃核、剥片素材の細石刃核、細石刃が出土している。鈴木はこの文化層を「後期旧石器時代の終末から新石器時代への変革の時期に相当する」とし、「愛媛県上黒岩洞穴の有舌尖頭器と隆帯文、広島県馬渡岩陰の有舌尖頭器と細線刻文との組み合わせに見られたように、中国、四国まで見られる土器の出現のあり方と違って九州独自のあり方として従来知られた細石器との組み合わせの姿が本遺跡において確認された」と評価している。

② 第二期（平成九年頃）

昭和五八年（一九八三）に宮崎学園都市建設に伴って堂地西遺跡の発掘調査が行われた。この調査は本県で初めてのまとまった草創期の資料の出土事例といえる。アカホヤ火山灰層下位のIV～V層上部にかけて口縁部周辺に隆帯をつまんで貼り付けた結果、隆帯上に横「ハ」の字の爪形文を残すものや肥厚させた口縁部周辺に爪形文を施すものなど五〇〇点が出土している。石器としては局部磨製石斧、砂岩製の石鏃、黒曜石製の細石刃、黒曜石製の剥片が同一層から出土した。これらがすべて共存すべきものなのかどうかはいまだ結論づいていない。又この調査では集石遺構に対して熱ルミネッセンス法による年代測定が行われており、一〇二二〇BPと九四五〇BPの年代が得られている。

平成二年（一九九〇）には串間市三幸ヶ野第二遺跡の発掘調査が行われた。サツマ火山灰層（一一〇〇〇BP）の下のVI～VII層から土坑一基、集石遺構二基と隆帯文土器等が検出されている。

平成三年には椎屋形第一遺跡の発掘調査が行われた。草創期の調査範囲は四〇〇mと小規模ながら、VI層から集石遺構二基と一〇〇〇点に及ぶ複数の施文方法の隆帯文土器や爪形文土器と共に石鏃や丸ノミ型石斧などの各種石器が出土している。本遺跡の調査によって貝殻押圧文土器が本県にも見られることが明らかになった。

平成五年には串間市西ノ園遺跡の確認調査が行われ、桜島パミスを含んだ層の下層において隆帯文土器の包含層が残っていることが確認された。

これらの調査事例で得られたまとまった資料は南九州の縄文章創期の土器編年の検討に取り上げられる示準資料となっている。

この二期では隣県の鹿児島県においても鹿児島市掃除山遺跡や南さつま市梶ノ原遺跡の発掘調査が行われるなど著しい草創期の資料増加が認められた。このような南九州地域の資料増加の結果を受けて平成五年（一九九三）に宮崎考古学会と南九州の縄文時代草創期を考える会主催で「南九州における縄文時代草創期の諸問題」というテーマで当時の資料集成や事実関係の確認、土器編年や文化様相の検討が行われた。また平成七年（一九九五）には鹿児島県考古学会と宮崎考古学会の合同研究会で「旧石器から縄文へ」というテーマで旧石器～縄文早期に関わる遺構・遺物の検討が行われ、草創期の資料についても概観されて検討すべき課題等がまとめられた。

さらにその二年後には宮崎縄文研究会によって刊行された『宮崎県内における縄文時代草創期の遺物集成』で県内の資料集成が行われ、草創期の遺跡は県内全域で二五遺跡に上がることが明らかになった。また同書では県内の草創期の遺物について検討が行われている。

③ 第三期（平成九年頃）

東九州自動車道関連や農業基盤整備事業等の開発事業に伴って大規模な発掘調査が多発し、草創期の資料はさらに激増した。二〇〇八年に筆者が一度集作業を行っており、その段階で草創期の遺構・遺物が見つかった遺跡数は七七まで増加していた。その後も資料は増え続け、今回八八遺跡にまで達することがわかった。その中で特に重要な調査成果が得られた遺跡について簡単に紹介する。東諸県郡国富町塚原遺跡では赤色顔料の塗布された草創期の土器が出土し、そのほかにも釣鐘状土製品の報告もある。またここでは

隆帯文土器と一部の細石刃核について層位的に分離した状態で出土している。同じ国富町の木脇遺跡ではそれまで確認されていなかった口縁部を肥厚させたような形態の隆帯文土器がまとまって出土している。

西臼杵郡高千穂町阿蘇原上遺跡ではⅧ層からⅩ層にかけて早期の遺物と混在する状況だが、他地域でみられるような爪形文土器と隆帯文土器が共出する遺物包含層が確認されている。またこれらの土器と剥片の木口部分に作業面を設定する細石刃核や尖頭器、石鏃などが出土しており、その共伴関係が注目されている。児湯郡高鍋町赤石天神元遺跡では草創期の遺物包含層が確認され、隆帯文土器に伴う石器資料がまとまって出土している。

児湯郡川南町尾花A遺跡では遺物を伴う竪穴状遺構が発見された。宮崎市清武町清武上猪ノ原遺跡第五地区や都城市山之口町王子山遺跡では多量の隆帯文土器や石器とともに、複数の竪穴住居（竪穴状遺構）、集石遺構や炉穴などの各種遺構が検出され、草創期の集落の様相が把握できるような調査結果が得られている。両遺跡ともに検出された遺構は重複する様子が見られ（第1図）、一定期間継続するような集落が隆帯文土器期には存在することが明らかになった。

前述のとおり、南九州の草創期文化は他地域との時間的な並行関係を取ることが難しいとされてきたが、清武上猪ノ原遺跡では隆帯文土器、矢柄研磨器などが出土しており、阿蘇原上遺跡出土の爪形文土器と共に、これらの遺物は他地域との比較材料となりうる。また重複する遺構群も各地で確認されていることから、列島規模での議論ができる条件が整いつつある。

三 現在までに検出されている遺構について

県南地域の都市や串間市の遺跡については、土層堆積が厚いことやサツマ火山灰が面的に見られることもあり、草創期と早期の遺構・遺物を層位的に分離して検出されることがある。一方、県央以北の地域ではサツマ火山灰が見つかることが少なく土層堆積も薄いことから、アカホヤ火山灰層下位から霧島小林軽石を含むローム層の上位にかけての土層中から早期の遺物と草創期の遺物が混在する状況で出土することが多い。また遺構についても理化学的年代測定法などを使用しないと同一調査区から検出されたものの帰属時期を明らかにすることは難しい状況である。

そのような状況の中でも近年の調査において草創期の遺構の検出事例は少しずつ増えている。以下に個別の遺構について概観する。

① 竪穴住居・竪穴状遺構

尾花A遺跡で竪穴状遺構一棟、清武上猪ノ原遺跡第五地区で竪穴住居一四棟、王子山遺跡で竪穴状遺構四棟が検出されている。三遺跡とも遺構埋土より多くの隆帯文土器等が出土している。

清武上猪ノ原遺跡第五地区の住居の平面プランは不整楕円形・不整円形・不整方形のものが見られ、その規模は長軸が五・二二〜二・一六m、短軸が五・二〜一・八m、床面積は一八・〇二〜三・三五 m^2 という状況でかなりばらつきがある。なお、住居に伴う柱穴はすべて竪穴の周囲で検出されている。また住居内には炉が検出されたものが五棟あり、そのうちの一つは石組炉であった。

王子山遺跡の竪穴状遺構に伴う柱穴は竪穴の周囲に検出されたものと竪穴内部に検出されたものと二種類確認されている。

草創期後半段階で竪穴住居を複数持つ集落は日本列島全体に見られることや竪穴住居の構造などから水ノ江和同は九州の草創期後半



第1図 清武上猪ノ原遺跡第5地区縄文草創期遺構配置図 (S=1/600)

の集落は列島全体と同じ枠組みの中でとらえることができると指摘している(水ノ江二〇〇九)。

なお、及川穰は清武上猪ノ原遺跡第五地区の一四棟の住居跡については遺構の切り合い関係から、多い場合でも三〜四棟の居住単位を想定している(及川二〇一四)。

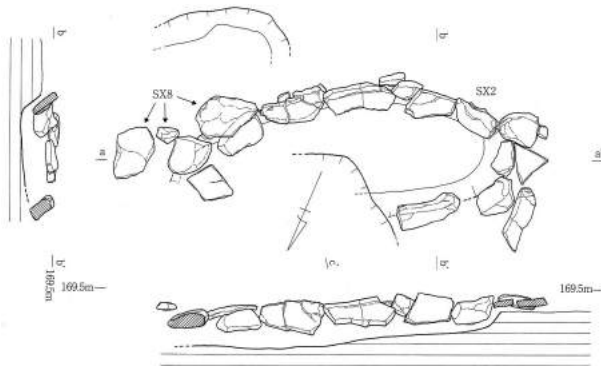
これらのほかに高鍋町牧内第一遺跡ではアカホヤ火山灰層下位の暗褐色ローム層から霧島小林軽石を含む褐色ローム層にかけて環状に巡るピット群が検出されており、テント的な施設が想定されているが、明確な遺物が伴っていないため早期の遺構の可能性も考えられる。同様の事例として延岡市山田遺跡、高鍋町野首第二遺跡、小林市内屋敷遺跡でも検出されており、これらは縄文早期のものとして報告されている。

② 集石遺構と配石遺構

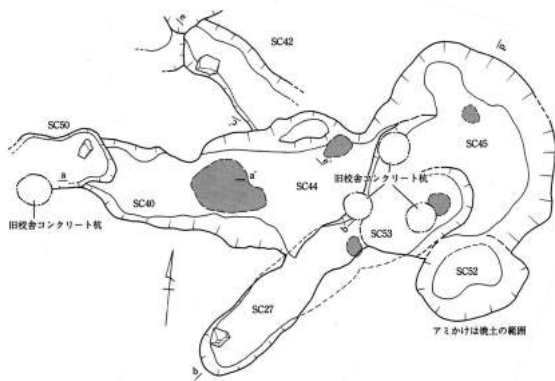
前述のとおり理化学的年代測定法などを使用しないと早期の資料と視覚的に分類することが特に困難な遺構である。早期の遺構との検出面の高低差や、草創期の遺物と平面分布が重なることなどを考慮して草創期の資料とされているものも含め、現在のところ一七遺跡三四基検出されている。

早期の集石遺構と比べると小規模のものが多い。また底石を持つものはなく、掘り込みがないものも目立つ。早期中葉にみられる深い掘り込みを有するような集石遺構は現状では検出されていない。

確実な草創期の配石遺構は三幸ヶ野第二遺跡で一基、王子山遺跡で八基検出されており、炉としての機能が想定されているものとうでないものが見られる。王子山遺跡では平面形が舟形のいわゆる舟形配石炉(第2図)も確認されている。またここでは炉穴との切り合い関係がみられるものも存在する。



第2図 王子山遺跡配石遺構実測図(S=1/40)



第3図 王子山遺跡炉穴実測図(S=1/80)

③ 炉穴・炉状遺構

遺構埋土に多くの焼土や炭化物を伴っていたり、床面に焼土が検出されたりすることで認定される遺構だが、集石遺構と同様に視覚的に早期の資料と草創期の資料を分類することが難しい状況で見つかることが多い。王子山遺跡では多くの切り合い関係が認められており(第3図)、長楕円形プランのものはその切り合い関係のために溝状となっているものもある。高鍋町北牛牧第五遺跡などで検出されている円形プランのものは地床炉が想定される。現状では炉穴が三遺跡三三基、地床炉が二遺跡二基検出されている。

④ 陥し穴

本遺構は基本的に遺物が伴わないと考えられるうえに、炭化物等も伴うことが少ないため、時期決定が難しい。埋土の状況や埋土中の炭化物の年代測定結果により草創期のものと判断されることが多く、現状では九遺跡一四基検出されている。

⑤ 土坑

清武上猪ノ原遺跡第五地区では一九基の土坑が検出されている。様々な規模・形態のものが見られるが、なかでもSC三二九は深さ約八〇センチの袋状縦穴のような形状で、埋土中から剥片素材の細石刃核と黒曜石や安山岩製の石鏃、隆帯文土器片等が出土しており注目される。王子山遺跡でも土坑一〇基が検出されており、貯蔵穴、廃棄土坑、墓壇などが想定されている。

また牧内第一遺跡では床面に複数のピットを有する土坑が検出されており、遺構埋土の放射性炭素年代測定結果によると一〇一四〇±六〇BPという年代が得られている。このような遺構は清武上猪ノ原遺跡第五地区や川南町前ノ田村上第二遺跡でも多数検出されているが、明確な帰属時期や用途はわかっていない。

⑥ 遺跡(遺構と遺物量)の増減について

馬籠亮道と筆者は近年の南九州の草創期の様相を紹介する中で、

隆帯文土器の時期を中心としてその前後では遺跡数の変動が見られること、検出される遺構にもばらつきがあることを指摘している。

宮崎県内の様子を見ても前隆帯文土器期（細石刃期）隆帯文土器の段階）では遺跡数が一四六遺跡、検出された遺構は礫群、陥し穴状遺構、土坑という状況で定住性は低いと考えられる。次の隆帯文土器期には遺跡数は四九遺跡と減少するが、検出された遺構は竪穴住居、集石遺構、炉穴、陥し穴状遺構、土坑と多岐にわたるようになり、遺物量も爆発的に増える状況から定住性が高まった様子がかがえる。隆帯文土器後の遺跡数は二四遺跡とさらに減少する。宮崎県ではこの時期の竪穴住居は検出されておらず、明確な遺構としては土坑だけで遺物量も少ない。そのため各時期の存続期間などを考慮する必要はあるが、竪穴住居などが構築される隆帯文土器段階や後続する早期前半段階と比べて、遺構形成活動は一旦低下している可能性が高いと指摘している（馬籠・秋成二〇一五）。

このような遺跡数等の変化の要因としては遺跡の年代幅や当時の人々の生活様式に大きく左右された結果が関係している可能性が考えられる。この点については当時の自然環境の変化等も踏まえたうえでさらなる検討が必要であろう。

四 草創期土器の研究

南九州の土器編年を構築していく中で多くの研究者が宮崎県・鹿児島県の資料について検討を行っている。その大きな流れとしては粘土貼付文や無文土器↓隆線文（細い隆帯文）↓太い隆帯↓隆帯文の口縁部への集中↓隆帯文の狭小化・形骸化から早期の貝殻円筒形土器様式への展開が考えられている。そのような研究の中で特に宮崎県の資料については三幸ヶ野第二遺跡、堂地西遺跡、椎屋形第一

遺跡の資料がよく取り上げられている。

雨宮瑞生は草創期前葉に鹿児島市の加治屋園遺跡・横井竹ノ山遺跡の資料を当て、中葉に掃除山遺跡、後葉に堂地西遺跡、鹿児島県指宿市岩本遺跡の資料を当てている（雨宮一九九四など）。児玉健一郎は草創期全体を隆帯文以前と隆帯文Ⅰ期〜Ⅳ期の五期に分けた。隆帯文Ⅰ期は隆線文土器の段階、Ⅱ期は幅広の隆帯文が出現する隆帯文土器の最盛期とし、Ⅲ期を隆帯の貼付部位が口縁部に集約される段階、Ⅳ期は隆帯の狭小化、単条化、形骸化と器形が円筒形になる段階と設定している。隆帯文Ⅱ期には三幸ヶ野第二遺跡、Ⅲ期には延岡市北方町蔵田遺跡・堂地西遺跡・椎屋形第一遺跡の隆帯文土器を当て、Ⅳ期には堂地西遺跡の隆帯文を巡らす円筒形の土器を当てている（児玉二〇〇八）。

これら論考のように宮崎県域の資料については草創期の中葉以降の資料に位置づけられることが多い中、村上は堂地西遺跡の資料を古い時期の資料と位置づけた。村上は長崎県佐世保市泉福寺洞穴の層位的な出土事例をもとに隆起線文（Ⅰ期）↓爪形文（Ⅱ期）↓擦糸文（Ⅲ期）と大きく三時期に区分し、椎屋形第一遺跡や堂地西遺跡で出土した隆帯文上に指頭押圧文が見られる資料や粘土紐を指で挟みながら隆帯を施文する土器をⅠ期に位置づけている（村上二〇〇〇）。雨宮や児玉が椎屋形第一遺跡や堂地西遺跡の資料を掃除山遺跡や鹿児島県熊毛郡中種子町三角山Ⅰ遺跡などの資料より新しく位置づけているが、村上はこれらを同時期のものとしている点がこれまで提示されていた編年観とは異なる見解である。しかし、村上はその後、この考えを細分して南九州の土器編年を隆起線に押圧が加わる土器（掃除山・三角山段階）↓隆起線上に矢羽根状に連続する摘み痕を残す土器（堂地西段階、第4図3・12）↓口縁部に密に爪形文を配する土器（椎屋形段階、第4図7・11）↓水迫・岩本段階とする変遷を想定し、日本列島西部の草創期土器編年を検討

している。この中で宮崎県南部の資料を一〇種類に分類しており、木脇遺跡や清武上猪ノ原遺跡第五地区で多く出土している口縁部を肥厚させたように見える隆帯文土器(第4図8・9)をⅩ類として紹介しているが、編年上の位置づけについてはここでは保留としている(村上二〇〇七)。

前述のとおり、他地域と比較検討できるような土器が南九州ではあまり出土事例がなく、南九州域での土器編年が議論の中心であった。しかし、阿蘇原上遺跡の発掘調査において他地域と比較できるような爪形文土器(第4図5)が隆帯文土器とともに出土したことによってその位置づけについての議論が行われている。

鈴木正博は阿蘇原上遺跡の爪形文土器について泉福寺洞穴六層の爪形文土器、佐世保市福井洞穴二層の爪形文土器と比較し、口唇部裝飾帯のあり方、爪形文の文様構成、施文密度、文様の区画帯が存在することを指摘し、「阿蘇原上式」を制定して、泉福寺六層や福井二層より古く位置づけた。区画帯の指摘について「下宿式」との共通性を述べている(鈴木二〇〇四)。なお、村上も本州と九州の爪形文土器を検討するにあたって阿蘇原上の資料に対しては鈴木と同様の見解を持っているようである(村上二〇一四)。

このように多くの研究者によって宮崎県域の資料は主に南九州全体の土器編年の中で検討されているが、県内の草創期土器編年については前述の村上の論考で触れられているほかには、日高孝治が提示しているくらいであまり議論は活発ではない。

日高は椎屋形第一遺跡の隆帯文土器についてⅠ類(粘土紐指押さえによる指頭圧痕、第4図6)、Ⅱ類(無文の三角隆帯)、Ⅲ類(隆帯上に棒状工具痕)、Ⅳ類(粘土紐を指先で挟みながら押さえつけて隆帯を施文したもの)の四種類に分類されていることを紹介し、堂地西遺跡ではこれらのうちのⅠ類が出土していないことを指摘した。さらにサツマ火山灰が確認され、その下層から草創期の遺物が出土

した西ノ園遺跡ではⅠ・Ⅱ類とⅣ類に相当する土器があり、堂地西遺跡のような爪形文が蜜に施文されている資料は見られないことを分析している。この爪形文土器については新東晃一が桜島テフラの下層から確認されており、桜島テフラの影響を受けていないと思われる地域に分布し、隆帯文土器よりも新しい資料として位置づけられていることを紹介した。

このような状況から雨宮等の示す隆帯文土器の編年について太目の隆帯を押しつけて貼り付ける段階↓隆帯を指先で挟んで貼り付ける段階↓隆帯を貼り付けるときに付いた爪形文が見られる段階への変遷で概ね理解できるとした。しかし、県北地域の蔵田遺跡や岩土原遺跡、県央地域の児湯郡新富町瀬戸口遺跡の資料の中には隆帯の幅や施文方法が異なるものがあり、県内における地域性も視野に入れる必要性を指摘している(日高一九九九)。

なお、堂地西遺跡の資料については大塚達郎が直接器面に指頭押圧を加え指頭圧痕文で上位紋様帯を表出する土器が粘土紐を螺旋状に巻きつけ、横方向に羽状のつまみ痕を残す手法の土器と併存する典型例として位置付けており、九州固有の爪形文土器の原型としてとりあげている(大塚一九八四)。

日高の論考と前後するが、宮崎縄文研究会による資料集成が行われた際に森田浩次・栗畑光博によって県内の草創期の土器について以下の五つの検討がなされている(森田・栗畑一九九七)。

①岩土原遺跡の細石器と土器(第4図1)の共出について

岩土原遺跡第二文化層で出土している隆帯文土器は、調査者の鈴木も福井洞穴で細石器と共伴した隆線文土器・爪形文土器とも様相が異なると述べていることを紹介したうえで、鹿児島県で細石器と共伴している粘土紐貼付土器や無文土器、鹿児島県出水市上場遺跡の爪形文土器のいずれとも様相が異なり、雨宮の草創期土器編年のなかの掃除山段階(草創期中葉)の資料に近似すると指摘した。

この第二文化層の細石器と土器の組み合わせについては北部九州に近いという地理的位置による南九州との石器組成の差によるものか、それとも第二文化層の細石刃核が二時期にわたるといふ見解があり、複数の時期の遺物が混在する状況を示している可能性があることを紹介している。

②蔵田遺跡出土土器（第4図2）について

蔵田遺跡出土土器と椎屋形第一遺跡や堂地西遺跡の隆帯の貼り付ける方法は同様であるが、蔵田遺跡の資料は隆帯が一条であるのに対し、県南部の遺跡のものが多条傾向にあるという点について県内の地域差を示す可能性を指摘している。

③霧島遺跡出土土器について

川南町霧島遺跡から出土している爪形施文の土器は草創期末から早期初頭のものとして報告されており、押型文土器が普及展開する直前の無文土器に類似していることを指摘した。

④田野町内の隆帯上貝殻施文土器について

県央部以北ではサツマ火山灰が認められず、草創期の土器が早期の遺物と混在して検出されることが多いこと、宮崎市田野町の青木遺跡と元野河内遺跡に隆帯上に二枚貝の背面ないし腹縁を連続押圧して施文した資料があることを紹介した。

同様の手法の土器は鹿児島県西之表市奥ノ仁田遺跡をはじめ種子島の遺跡において確認されており、田野町の資料は隆帯文土器の貝殻施文の広がり把握するために貴重であると指摘している。

⑤串間市内出土遺跡の草創期土器の出土層準について

西ノ園遺跡がサツマ火山灰より三〇cm下層から、三幸ヶ野第二遺跡はサツマ火山灰の直下から遺物が出土していることを紹介し、両遺跡の土器を雨宮編年の草創期中葉から後葉に位置づけた。さらに西ノ園遺跡の資料は太い隆帯文、三幸ヶ野第二遺跡のほうは細い隆帯文で隆帯文の退化形態とも考え、サツマ火山灰を利用した両遺跡

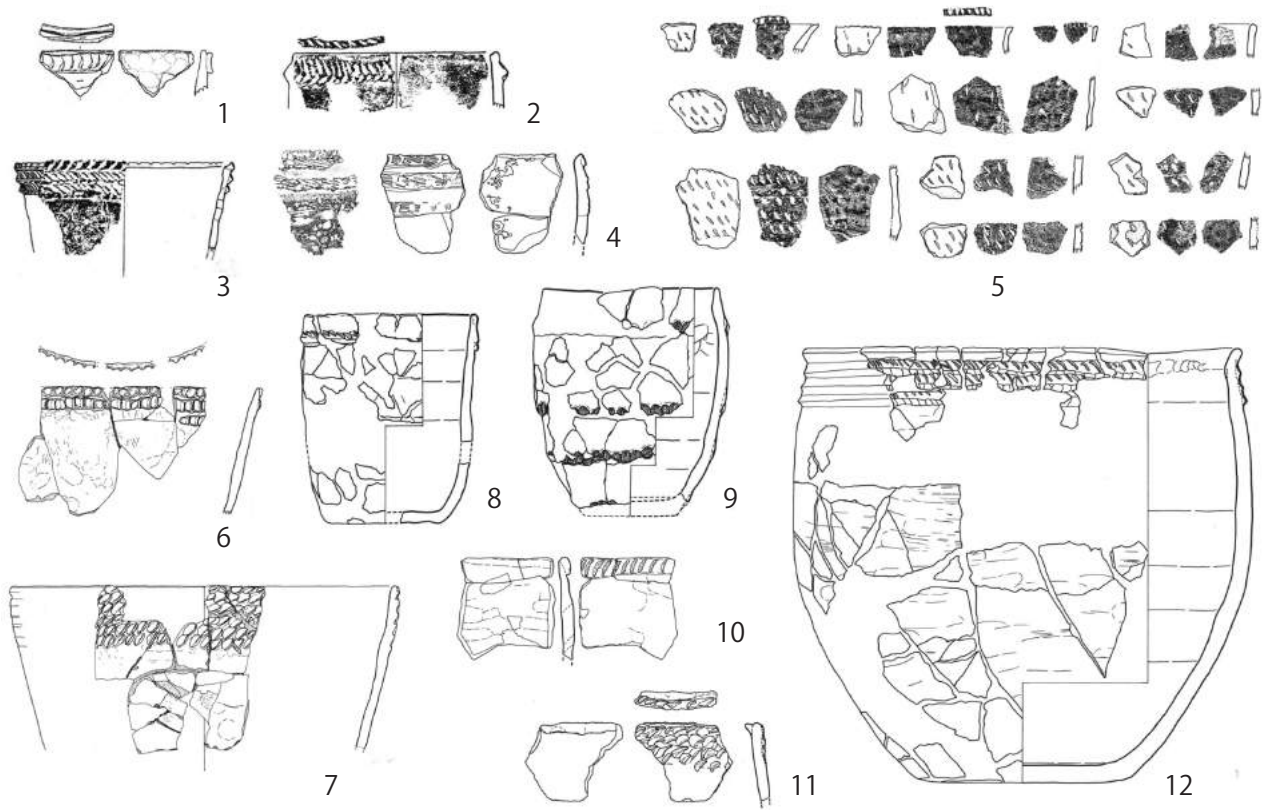
の遺物の出土レベルが土器様相や時期差を現していると指摘している。

この五つの検討は当時の資料集成に伴って行われたものであるが、未だ検討されていない問題提起がなされている。それは県内での地域色の検討である。県内の地域性を視野に入れる必要があることは日高も指摘しており、南九州の草創期は隆帯文土器文化とひとくくりにするのではなく地域色を検討しなければ現状で分類されている資料が時間軸の縦並びのものなのか、横並びなのかということの詳細は不明なままとなってしまふ。今後取り組まなければならない重要な課題といえる。

この二つの論考のほかには、ここ数年は県内の草創期の土器について目立った議論は行われていなかったのだが、近年の調査成果を受けて二つの論考が書かれている。前者は今まであまり議論が活発でなかった県内の貝殻押圧文土器について、後者は隆帯文土器の施文方法の変遷を王子山遺跡の調査成果の中で追認できたことを紹介しているものである。

筆者は近年の調査成果から宮崎県にも貝殻押圧文土器が少なくとも児湯郡以南には存在することを紹介し、貝殻押圧文が施される土器にはやや胴が貼り内湾する口縁部の器形（第4図9）がみられること、隆帯は単条のものや多条だが薄くその単位が不明瞭なもの、肥厚帯を持つタイプがあることを指摘し、児玉編年の隆帯文Ⅲ期に位置づけられるとした。さらに隆帯の特徴からⅢ期の中でも新しい様相を示しており、水迫式の前段階に位置づけられると考えているが、これらの今後の課題としては県南部の王子山遺跡の資料の出土状況との整合性を整理することを挙げている。

またこの論文中で宮崎平野部にも隆帯文土器の出土例（第6図）があることを紹介し、それが児玉編年の隆帯文Ⅰ期位置づけられることも指摘している（秋成二〇一四）。



1岩土原 2蔵田 3堂地西 4清武上猪ノ原第2地区 5阿蘇原上 6~7椎屋形第1 8~12 清武上猪ノ原第5地区

第4図 県内出土の隆帯文土器・爪形文土器実測図(S=1/6)

栞畑は王子山遺跡から出土した隆帯文土器を大きく指頭の押圧手法によるもの（Ⅰ類）、親指と人差し指のつまみ手法によるもの（Ⅱ類）に分類した。その他に隆帯状に文様が認められないもの（Ⅲ類）、口縁部に肥厚帯を持つもの（Ⅳ類）、隆帯を持たずに口縁部に爪形文を施すもの（Ⅴ類）、まったく文様の見られないもの（Ⅵ類）に分類した。さらに本遺跡で検出された遺構の土器の出土状況からⅠ類とⅡ類が共出する遺構とそれぞれ単独で出土する遺構があることに注目し、それらの遺構の切り合い関係からⅠ類からⅡ類の時間的変遷を確認し、これまで研究者が提示した隆帯文土器の型的組列の証左になると述べた。ただしここでのⅠ類の中には貝殻施文の土器は含まないものとしている。

貝殻施文の土器とⅡ・Ⅲ類が近い時期、Ⅵ類がⅠ類かⅡ類のどちらかに伴うものとし、Ⅳ類のうち口縁部に刺突文を施すものは他地域からの移入品で、Ⅴ類の爪形文については一点のみの出土なので客体的な存在である可能性を指摘している。

また都城市高城町軍人原遺跡において細石刃と共伴する無文の土器小片が出土しており、王子山遺跡よりも古く位置づけられる可能性のある資料と紹介している（栞畑二〇一五）。

前述のとおり、県内の資料は南九州全体の草創期の土器編年に組み込まれるという形で検討されてきた。今後の主な課題としては隆帯文土器や肥厚帯を持つ隆帯文土器などの新資料を含める県内資料の編年の提示、それには地域性の検討や貝殻施文土器(第4図4・9・10)の位置づけなどを含める隆帯文土器の細分化を検討する必要があるだろう。

この特に遺物量の多い隆帯文土器については隆帯の貼り付け手法や隆帯上の施文方法、文様帯、器形など個別の要素に注目してその系統ごとに変遷を検討したうえで、セット関係や時間的な前後関係を確認するようにより詳細な分析が必要だと考えられる。

また、無文土器の検討も必要である。具体的には鹿児島県始良市建昌城跡や後述する清武上猪ノ原遺跡第五地区などで出土しているような資料の位置づけである。これらが隆帯文土器と並行する時期のものなのかその後位置づけられるものなのか新資料を含めて考えるべきであろう。

もちろん従来からの課題である列島他地域との比較、細石器と共伴する土器について検討することも忘れてはならない。

五 草創期石器の研究

本県では岩土原遺跡第二文化層の出土事例から細石刃と土器の共伴の問題などが古くから論じられている。その他に九州旧石器文化研究会等の研究発表によって石鏃や尖頭器、石斧についての検討が行われている。以下に主な論考について紹介する。

① 岩土原遺跡第二文化層の検討について

松本茂が岩土原遺跡第二文化層の出土遺物について塚原遺跡の層位的な出土事例をもとに細分案を検討している。第二文化層には隆帯文土器と泉福寺・羽佐島Ⅲ型・船野型という二つの細石刃核が存在することを確認した上で、塚原遺跡の船野型・畦原型の細石刃核がⅦ層主体、隆帯文土器や石斧関連資料がⅥa～Ⅵb層主体で出土しているという調査成果をもとに第二文化層の出土遺物を【船野型】↓【泉福寺・羽佐島Ⅲ型+隆帯文土器】または【船野型】↓【泉福寺・羽佐島Ⅲ型】↓【隆帯文土器】と細分できる案を提示している（松本二〇〇三a）。

② 細石器と共伴の問題

宮崎県旧石器文化談話会によって宮崎県内の旧石器時代の編年案が提示された（宮崎県旧石器文化談話会二〇〇五）。その中で細石

刃文化期の最終段階に土器を伴う可能性を指摘している。以下に細石刃文化期の編年案である第八段階から第一〇段階の概要を記す。

第八段階（細石刃石器群の出現期）…野岳・休場型細石刃核主体円錐形の細石刃核や、黒曜石の小礫を使用するもののうち、作業面と打面が急角度で交わるものが該当。

第九段階（細石刃石器群の展開期）…断面U字形の船野型細石刃核や黒曜石製小型の細石刃核の使用。畦原型の出現期。

第一〇段階（細石刃石器群の終末期）…西海技法の影響が見られ、細石刃核の扁平化・底部形態の変容・作業面の狭小化が見られる（剥片の木口部分に作業面を設ける細石刃核が目立つ）。

第一〇段階において土器や石鏃、尖頭器との共伴が問題となり、この段階が草創期に該当する。前半期には隆線文土器やそれ以前の土器の共伴関係が、後半期には隆帯文土器や爪形文土器との共伴関係が想定される。前半期から後半期への移行は船野型細石刃核の消滅。畦原型の小型化と扁平化が指摘されている。

新東によって南九州では隆帯文土器期の細石刃の消失が指摘されていたが（新東一九九八など）、前述した阿蘇原上遺跡の遺物包含層の出土状況や清武上猪ノ原遺跡第五地区のSC三二九の埋土中の遺物の出土状況など、岩土原遺跡の事例も含めて本県では細石刃が隆帯文土器の時期まで使用されていた可能性が見られ、これらは第一〇段階後半の資料と考えられる。

このほかに草創期の石器群の変遷としては芝康次郎が九州の草創期石器群の変遷案を検討する中で南九州の資料にも触れている。芝はa後期旧石器時代末葉の細石刃石器群（野岳型・船野型）↓b草創期細石刃石器群（福井型・石鏃）↓c草創期石鏃石器群（隆帯文土器段階以降）という変遷をしめしている。その中で宮崎県の資料として、a段階の前半には尾花A遺跡、前ノ田村上第二遺跡、宮崎市佐土原町船野遺跡の資料を、後半に宮崎市佐土原町下屋敷遺跡、

宮崎市清武町白ヶ野第二・三遺跡、高鍋町小並第一遺跡を挙げている。b 段階には延岡市北方町黒仁田遺跡、c 段階に隆帯文土器が多数出土した塚原遺跡、椎屋形第一遺跡、清武上猪ノ原遺跡群、王子山遺跡などを挙げ、この段階には宮崎平野部に特に遺跡が密集する傾向があると指摘している。

③ 長者久保・神子柴文化関連遺物について

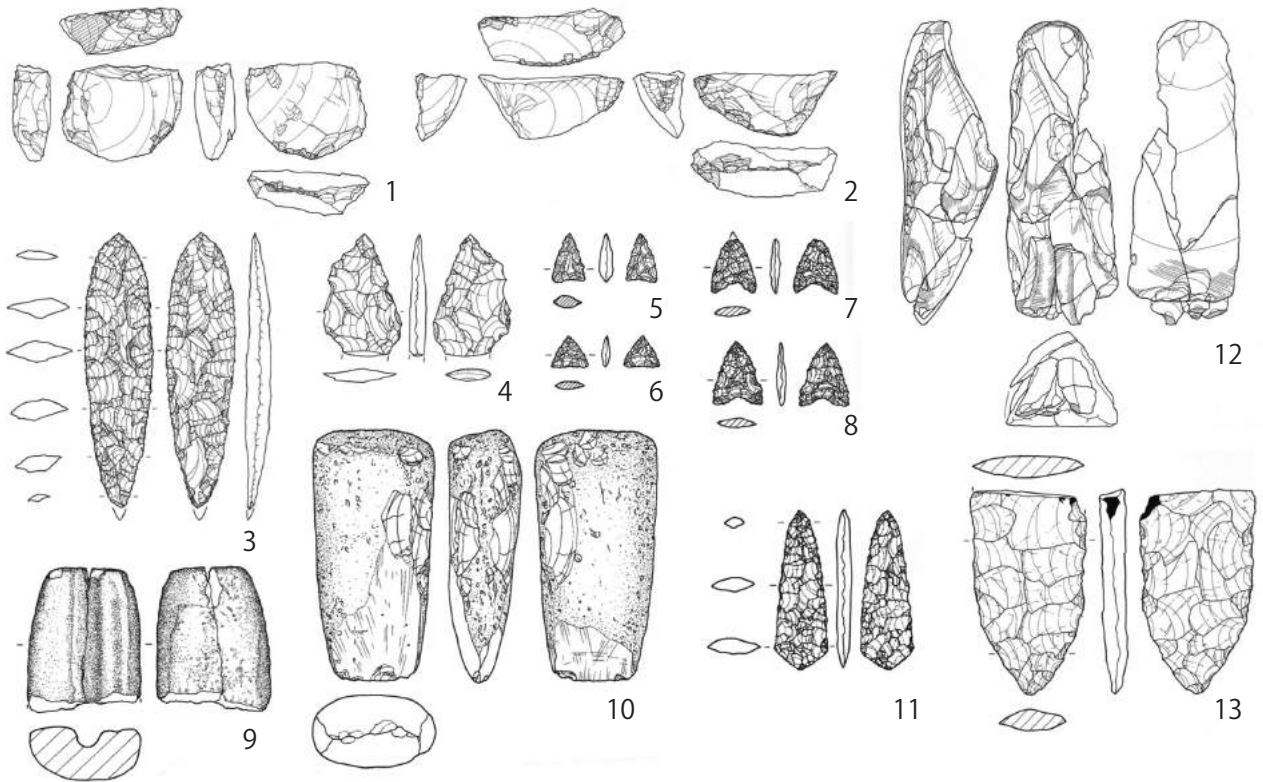
一九九七年の資料集成において金丸武司が県内の長者久保・神子柴文化関連遺物についてまとめている。この時点では九遺跡二一例が確認されたものの、確実な草創期初期の遺物包含層からの出土事例としては出羽洞穴の資料だけであること、大分県・鹿児島県の様相からは土器との共伴より細石刃文化期との関係がより密接であることを指摘している（金丸一九九七）。

この集成の後、白ヶ野第二・三遺跡（第5図12）や宮崎市田野町天神河内遺跡、高鍋町唐木戸第三遺跡で神子柴型石斧（の可能性がある資料）の出土事例が報告されている。

④ 石鏃について

前回の筆者の集成では平面形が三角形のものはチャート、二等辺三角形のものは黒曜石やチャートの使用が目立つことを指摘した（第5図5・6）。また清武上猪ノ原遺跡第五地区で脚部の先端が尖る安山岩製の石鏃が多数出土しており、草創期の石鏃として特徴的で注目されると紹介している（第5図7・8、秋成二〇〇八b）。なお及川はこのタイプの石鏃について東京都もみじ山遺跡や八ヶ上遺跡、深見諏訪山遺跡に系譜があると述べている（及川二〇一四）。

出現期の石鏃については草創期の石器研究で必ず取り上げられる問題であるが、これまでの南九州の石鏃研究において出現期の資料として本県のものを取り上げられてはいない。本県最古の石鏃がどの遺跡の資料なのか、細石器との共伴関係や最古の土器にもかかわる問題であり大変興味深い。



1~4 阿蘇原上 5~10 清武上猪ノ原第5地区 11雀ヶ野第3 12白ヶ野第2・3 13 清武上猪ノ原第2地区

第5図 県内出土の草創期石器実測図(S=1/3)

⑤ 尖頭器について

松本によって旧石器時代から縄文早期までの資料集成が行われている。草創期の様相としては代表的な遺跡として阿蘇原上遺跡、清武上猪ノ原遺跡第二地区を挙げている。阿蘇原上遺跡では爪形文土器、隆帯文土器、細石刃石器群、両面調整石器を伴い、石鏃も含む可能性が高いとしている(第5図1~4)。細石刃核と爪形文土器から泉福寺洞穴の第六層に比定されるとしている。遠隔地の石材を用いないことについて、出羽洞穴Ⅲ層の資料とともにこの段階以降の五ヶ瀬川流域の地域性とも指摘している。

また清武上猪ノ原遺跡第二地区のサヌカイト製の薄手幅広の両面加工尖頭器(第5図13)については県内に類例がなく、同一層からは隆帯文土器・爪形文土器が出土しており、これらが同時期とすれば重要な編年の指標となる遺物であると述べている(松本二〇〇三b)。その後、松本はこの薄手幅広のサヌカイト製の尖頭器の類例として阿蘇原上遺跡の安山岩製の資料(第5図4)を挙げている(松本二〇〇三c)。

なお、阿蘇原上遺跡の評価については白石浩之が(細石刃核+槍先形尖頭器)↓(爪形文・隆帯文土器)という変遷案を提示しており、松本とは異なる見解を示している(白石二〇〇三)。

有舌尖頭器について、以前は分布の南限として高千穂町セベツト遺跡の事例が有名であったが、日向市東郷町向原中尾第四遺跡、北牛牧第五遺跡、宮崎市清武町坂元遺跡、都城市高城町雀ヶ野第三遺跡(第5図11)と出土例が増えており、県内全域で確認されるようになってきている。松本は北牛牧第五遺跡の資料について西之表市鬼ヶ野遺跡の尖頭器と類似すると述べ、今後本州・四国との有茎尖頭器との比較だけでなく九州南部地域との比較検討も視野に入れる必要性を指摘している。(松本二〇〇三c)

⑥ 磨製石斧(第5図10)について

松本はセベツト遺跡の丸ノミ型石斧の紹介を行い、内陸山間部で発見される丸ノミ型石斧の意味を知ることが当該期の生活者像を描く上で重要であると指摘している。また鹿児島県から宮崎平野部の隆帯文土器期には丸ノミ型石斧だけでなく多様な形態のものを含んでおり、時期をさかのぼる細石刃文化期の石斧の検討についても課題であると述べている(松本二〇〇四)。

藤木聡は宮崎県の縄文時代の石斧製作についてまとめており、草創期の石斧製作について塚原遺跡の事例を挙げている。この遺跡の石斧の使用石材は砂岩系と緑色珪質岩系のものに大別される。砂岩系のもはコッペパン状の原石を分割して背面側に礫の緩やかなカーブを残す断面かまぼこ状の石斧原形を獲得する。その後分割面側に対して縁辺から剥離を加え最終的に刃部表面から側面まで研磨し、やや丸みをもつ刃部を作り出す。緑色珪質岩のものも同様に素材礫の持つカーブを石斧器面に取りこんでいる。この器面に礫面を取り込む手法は剥離・敲打・研磨等を省くという石斧製作の効率化、固い礫表皮による強固な器面の獲得の実現が想定され、この手法は早期石斧にも続くと指摘している(藤木二〇〇五)。

このように狩猟具や石斧についての検討は行われているものの、各遺跡での石器組成や使用石材についての検討は本県ではあまり活発ではない。前述のとおり、宮崎県の場合は早期の遺物包含層中に草創期の遺物が混在することが多く、有文の土器以外の草創期の資料の把握が困難であることが石器研究に影響しているものと思われる。また包含層中の遺物の出土状況の検討についても後述する清武上猪ノ原遺跡第五地区の事例ぐらいである。遺構配置や石器組成などを考慮した各遺跡の居住活動の復元も今後の課題である。

六 近年出土した注目すべき遺物

このほかに近年出土した特徴的な遺物について紹介を行う。

① 丹塗り土器

塚原遺跡では内外面にベンガラを塗布した土器が出土している。その他に清武上猪ノ原遺跡でも爪形文土器の外面に赤色顔料が塗布された資料が出土している。

② 隆線文土器(第6図)

清武上猪ノ原遺跡第一・五地区で隆線文土器が出土している。細身の隆線上に押圧またはキザミが施されている。現在の編年観において有文の土器としては県内最古のものとして位置づけられる。

③ 矢柄研磨器(第5図9)

清武上猪ノ原遺跡第五地区では前述のとおり八個体の矢柄研磨器が出土している。いずれも砂岩製で、特に石英質が高いものが六点ある。平面形は長方形または卵形、断面形はかまぼこ状であり典型的な形状を呈している。本遺跡では矢柄研磨器はすべて住居の南西部で出土しており(第1図)、その付近では石器の出土率が高いことから集落内に道具の製作区域が設けられていたことがわかった。

④ 土製円盤

清武上猪ノ原遺跡第五地区では焼成前穿孔の土製有孔円盤が出土している。また王子山遺跡では土製円盤や土製有孔円盤が一四点とまとまった数量が確認されており、隆帯文土器期に存在する土製品として捉えられるようになった。

⑤ 土製品(ミニチュア土器を含む)・石製品

塚原遺跡で釣鐘状の土製品が出土している。清武上猪ノ原遺跡第五地区では様々な形の不明土製品が出土している。その他に無文丸底の深鉢形と無文の皿形のミニチュア土器が出土している。これら

のミニチュア土器は他に類例がないほど小さなものである。

また石製品としては王子山遺跡で表面がツルツルの石鏃形の白色の石製品や不明軽石製品が出土している。

七 その他の調査・研究成果

① 植物質食料について

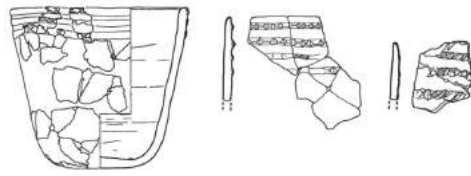
王子山遺跡では炉穴と考えられるSC二八・三三からコナラ属の炭化子葉と炭化鱗莖類(SC二八はアサツキ・ノビルとワケギという同定結果)が、SC三七からもコナラ属の炭化子葉が出土している。これらの炭化物については年代測定が行われており、その数値については後述している。なお各遺構からは隆帯文土器等の遺物も出土している。また土器圧痕レプリカ法によってツルマメ・エノコログサの種子が検出されている。そのほかに本遺跡から出土した磨石、敲石、石皿八点を対象に残存デンペン分析が行われており、そのうち七点からデンペンが検出された。このデンペン粒は鱗莖・根莖類や堅果類のデンペン粒の可能性が高いということである。

② 放射性炭素年代測定結果の蓄積について

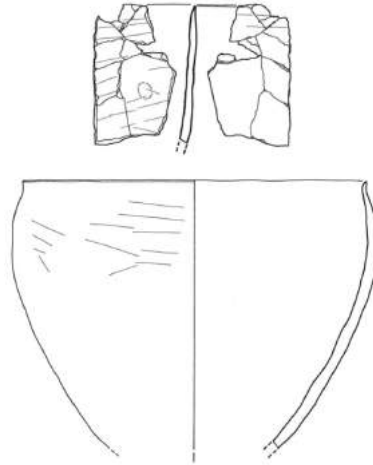
近年、隆帯文土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定法の結果がまとまってきており、その測定値からも他地域との時間的な並行関係を考えることができそうになっている。

測定結果は宮崎県において六点あり、補正年代で一二〇八〇±四〇BP〜一一三五〇±七〇BPという値が得られており、隆帯文土器の年代値は概ね一二〇〇〇〜一一〇〇〇BPの範囲に収まると考えられる。なお、隆帯文土器が主体となっている清武上猪ノ原遺跡第五地区の竪穴住居八棟から出土した炭化物からも補正年代で一一七二〇±四〇BP〜一一三三〇±六〇BPの数値が得られ、

同じく隆帯文土器主体の王子山遺跡の炉穴から出土した炭化物五点も補正年代で一・一五〇五±三・五BP(一・一四三〇±三・五BP)の数値が得られており、隆帯文土器付着炭化物の年代とも矛盾しない。この年代値は他地域で見られる爪形文系土器(萩谷二〇〇八)や円孔文系土器(谷口二〇〇八)と並行する可能性が指摘できる。



第6図 清武上猪ノ原遺跡出土
隆線文土器実測図(S=1/6)



第7図 清武上猪ノ原遺跡第5地区
SC313出土土器実測図(S=1/6)

このほかに清武上猪ノ原遺跡第五地区のSC三一三から出土した無文土器の付着炭化物についても年代測定が行われており、一〇九〇〇±四〇BPの年代が得られている(第7図)。この測定値によると本遺構の出土土器は隆帯文土器の次の段階に位置づけられると考えられ、水迫式土器との前後関係の把握が課題となる。

八 おわりに

近年の資料の大幅の増加によって南九州の初期縄文文化を日本列島全体の中で位置づけられるような調査成果が遺構・遺物の両面に

おいて散見されるようになってきた。すでに日本列島を俯瞰する視点から地域間の整合性を確認する研究が進められており(物質文化二〇一四)、草創期の研究は新しい段階へと突入している。

その一方で南九州という区域にひととめにされないように宮崎県の地域性を追求した今後の研究が望まれる。その進展によってより南九州の特徴が明らかになっていくことだろう。

宮崎県の縄文時代草創期研究の現状について概観してきたが、筆者の力量不足で取り上げることのできなかつた研究や研究内容をきちんと読みとれなかつたものもあるかもしれない。その点についてはご容赦いただきたい。

【註】 今回の集成作業は前回と同様(秋成二〇〇八b)、「縄文章創期は土器の出現から」という定義のもと行った。そのため土器を伴っていない細石刃核だけが出土している遺跡については集成していない。今後はこの点も検討のうえ、再度集成作業が必要となるだろう。なお、遺構の年代測定結果については隆起線紋土器が出土している福井洞穴Ⅲ層と土器が出土していないIV層の年代を参考(柳田二〇一四)に一三五〇〇〜一〇〇〇〇BPの数値が得られている遺構を取り上げている。

参考文献(調査報告書は紙面の都合上割愛した)

- 秋成雅博 二〇〇八a 「国内最大級の縄文時代草創期集落・清武上猪ノ原遺跡の調査」『月刊文化財』平成三〇年十一月(五四二号)、第一法規株式会社
- 秋成雅博 二〇〇八b 「南九州の縄文章創期の様相(宮崎県の縄文章創期概観)」『九州旧石器』第二二号、九州旧石器文化研究会
- 秋成雅博 二〇一四 「宮崎平野部の貝殻押圧文土器について」『宮崎県中央地域の考古資料に関する編年的研究・東九州道調査以後の新天地』、宮崎考古学会
- 雨宮瑞生 一九九一 「南九州の縄文章創期土器」『南九州縄文通信』No.四、南九州縄文研究会
- 雨宮瑞生 一九九四 「南九州縄文時代草創期土器編年・太目の隆帯文土器群から貝

- 殻円筒形土器への変遷」、『南九州縄文通信』No.八、南九州縄文研究会
- 雨宮瑞生 一九九七 「南九州縄文時代草創期土器編年(補遺)―他地域土器との関連性の模索」、『南九州縄文通信』No.一一、南九州縄文研究会
- 今村結紀 二〇一三 「南九州の縄文時代草創期と早期の様相」、『第一〇回韓日新石器時代共同学会発表資料集 韓・日初期新石器文化比較研究』、韓国新石器学会
- 岩永哲夫 一九九三 「宮崎県の縄文時代草創期遺跡調査史」、『南九州における縄文時代草創期の諸問題』、宮崎考古学会・南九州の縄文草創期を考える会
- 岩永哲夫 一九九七 「宮崎県の縄文草創期をめぐる調査略史」、『宮崎県内における縄文草創期の遺物集成』、宮崎縄文研究会
- 大塚達郎 一九八四 「草創期の土器」、『縄文土器大観』、小学館
- 及川 穰 二〇一四 「日本列島における出現期石鏃の型式変遷と広域運動」、『物質文化』九四、物質文化研究会
- 遠部 慎・宮田佳樹 二〇〇八 「宮崎県における土器付着炭化物の炭素一四年代測定」、『宮崎考古』第二二号、宮崎考古学会
- 鹿児島県考古学会・宮崎考古学会 一九九九 『旧石器から縄文へ』
- 金丸武司 一九九七 「宮崎県内の長者久保・神子柴文化関連遺物について」、『宮崎県内における縄文時代草創期の遺物集成』、宮崎縄文研究会
- 栗畑光博 二〇一五 「宮崎県王子山遺跡における縄文時代草創期遺構群の調査」、『第一一回日韓新石器時代研究会発表資料集』、九州縄文研究会
- 国立歴史民俗博物館 二〇〇九 『企画展示 縄文はいつから!? 一万五千年前に何がこったのか』
- 児玉健一郎 二〇〇一 「旧石器時代から縄文時代へ―南九州の場合―」、『第四紀研究』第四〇号、日本第四紀学会
- 児玉健一郎 二〇〇八 「南九州隆帯文・爪形文土器」、『総覧 縄文土器』(株)アムプロモーション
- 小林 謙一 二〇〇六 「AMS C年代測定による縄文草創期・早期の年代研究」、『九州縄文時代早期研究ノート』第四号、九州縄文時代早期研究会
- 寒川朋枝・福井俊彦・大西智和・栗畑光博 二〇一一 「宮崎県都城王子山遺跡における植物利用についての検討・ウオータ・セラレーション分析と残存デンプン分析から」、『九州考古学』第八七号、九州考古学会
- 芝 康次郎 二〇一四 「九州地方における縄文時代草創期石器群の変遷」、『第二一回考古学研究会東海例会 環境変化と人類活動・更新世から関心性への移行と東海地方の石器群』、考古学研究会東海例会
- 下山覚・鎌田洋昭 一九九九 「水迫式土器の設定―南部九州の隆帯文土器から貝殻文円筒形土器への土器型式の変化について―」、『ドキドキ縄文さがし展』図録、指宿市教育委員会
- 白石浩之 二〇〇三 「九州等における有舌尖頭器の出現とその様相」、『九州旧石器』第七号、九州旧石器文化研究会
- 新東晃一 一九九八 「南九州の特殊性・草創期を中心に」、『季刊考古学』第六九号、雄山閣
- 鈴木正博 二〇〇四 「岩土原への想い―阿蘇原上式」の制定とその意義」、『九州縄文早期研究ノート』第二号、九州縄文時代早期研究会
- 谷口康浩 二〇〇八 「円孔文系土器」、『総覧 縄文土器』、(株)アムプロモーション
- 寺原 徹 二〇〇六 「南九州における縄文草創期の諸問題」、『南九州縄文通信』No.一七、南九州縄文研究会
- 萩谷千明 二〇〇八 「爪形文系土器」、『総覧 縄文土器』、(株)アムプロモーション
- 日高孝治 一九九九 「宮崎県における縄文時代草創期の様相」、『鹿児島考古』第三三三号、鹿児島県考古学会
- 藤木 聡 二〇〇五 「宮崎県域における縄文時代の石斧製作と石材」、『Stone Source』No.五、石器原産地研究会
- 物質文化研究会 二〇一四 「特集・縄文時代草創期と広域運動」、『物質文化』九四
- 馬籠亮道・秋成雅博 二〇一五 「南九州の移行期」、『季刊 考古学』第一三二号、雄山閣
- 松本 茂 二〇〇三a 「東南部九州における細石刃石器群編年に関する覚書」、『宮崎県岩土原遺跡第二文化層の再検討』、『富山大学考古学研究室論集 蜃気楼』
- 秋山進午先生古希記念・、秋山進午先生古希記念論集刊行会
- 松本 茂 二〇〇三b 「宮崎県における槍先形尖頭器の出現と消滅」、『九州旧石

- 器』第七号、九州旧石器文化研究会
- 松本 茂 二〇〇三c 「草創期～早期の石器研究における諸問題（Ⅰ）九州東南部の尖頭器を中心に」 『九州縄文早期研究ノート』 第一号、九州縄文時代早期研究会
- 松本 茂 二〇〇四 「草創期～早期の石器研究における諸問題（Ⅱ）九州東南部における円ノミ型石斧の動向」 『九州縄文早期研究ノート』 第二号、九州縄文時代早期研究会
- 水ノ江和同 二〇〇九 「Ⅳ 九州地方の縄文集落と「縄文文化」」 『シリーズ縄文集落の多様性Ⅰ 集落の変遷と地域性』、有山閣
- 宮崎県旧石器文化談話会 二〇〇五 「宮崎県下の旧石器遺跡概観」 『旧石器考古学』 第六号、旧石器文化談話会
- 宮崎縄文研究会 一九九七 『宮崎縄文研究会資料集Ⅰ 宮崎県内における縄文時代草創期の遺物集成』
- 宮田栄二 一九九八 「縄文時代草創期の石器群隆起線紋土器段階の地域性とその評価」 『南九州縄文通信』 No.一二、南九州縄文研究会
- 宮田栄二 二〇〇〇 「南九州の縄文草創期・遺構と居住活動」 『旧石器から縄文へ・遺構と空間利用』、日本考古学協会二〇〇〇年度鹿児島県大会実行委員会編
- 村上 昇 二〇〇〇 「九州地域に於ける縄文時代草創期土器編年試論」 『南九州縄文通信』 No.一四、南九州縄文研究会
- 村上 昇 二〇〇七 「日本列島西部における縄文時代草創期土器編年・南九州地域を中心に」 『日本考古学』 第二四号、日本考古学協会
- 村上 昇 二〇一四 「九州における爪形文土器の編年上の位置づけについて」 『物質文化』 九四、物質文化研究会
- 森田浩史・栗畑光博 一九九七 「宮崎県縄文時代草創期の土器について」 『宮崎県内における縄文時代草創期の遺物集成』 宮崎縄文研究会
- 柳田裕三 二〇一四 「コラム 福井洞窟・長崎県佐世保市」 『季刊考古学』 第一二六号、雄山閣

(表1) 宮崎県下の縄文草創期の遺跡一覧①

番号	遺跡名	所在地	検出遺構	主要遺物等
1	出羽洞穴	西臼杵郡日之影町		尖頭器・石斧・原産地遺跡
2	セベツト	西臼杵郡高千穂町		有舌尖頭器・丸ノミ型石斧
3	阿蘇原上	西臼杵郡高千穂町		爪形文・隆帯文・細石器・尖頭器
4	山田	延岡市小川町	陥し穴1	細石器・尖頭器
5	蔵田	延岡市北方町		隆帯文・石鏃?
6	岩土原	延岡市北方町		細石器・隆帯文
7	笠下	延岡市北方町		尖頭器
8	岡・9次	日向市	集石遺構1	
9	向原中尾第4	日向市東郷町		有舌尖頭器
10	辰之元	東臼杵郡北郷村		尖頭器
11	朝草原	児湯郡都農町	礫群1	無文・細石器
12	立野第5	児湯郡都農町	集石1	細石器
13	霧島	児湯郡川南町		無文・爪形文・細石器
14	国光原	児湯郡川南町	集石1?・土坑1	隆帯文・爪形文・石鏃?
15	八幡第2	児湯郡川南町	集石1	隆帯文・石斧
16	前ノ田村上第2	児湯郡川南町	土坑群?・集石遺構1	隆帯文・無文・細石器
17	登り口第1	児湯郡川南町		爪形文
18	尾花A	児湯郡川南町	竪穴状遺構1	隆帯文・爪形文・貝殻押圧文
19	虚空蔵免	児湯郡川南町		隆帯文
20	赤石・天神本	児湯郡川南町		隆帯文・爪形文・石鏃・石錐・楔形石器
21	市納上第2	児湯郡川南町		刺突文・細石器
22	前ノ田村	児湯郡川南町		隆帯文
23	野首第2	児湯郡高鍋町		爪形文・細石器
24	北牛牧第5	児湯郡高鍋町	炉状遺構1	無文?・細石器・有舌尖頭器・石鏃?
25	牧内第1	児湯郡高鍋町	土坑2・環状ピット群?	爪形文・隆帯文?・石鏃?
26	牧内第2	児湯郡高鍋町		隆帯文・石鏃?
27	唐木戸第3	児湯郡高鍋町	炉状遺構1・陥し穴1	細石器・神子柴型石斧?
28	唐木戸第4	児湯郡高鍋町		無文?・細石器
29	老瀬坂上第3	児湯郡高鍋町		隆帯文・水迫岩本・細石器
30	崩戸	児湯郡高鍋町		隆線文?・隆帯文・尖頭器・細石器
31	瀬戸口	児湯郡新富町		隆帯文・細石器・石斧?

(表2) 宮崎県下の縄文草創期の遺跡一覧②

番号	遺跡名	所在地	検出遺構	主要遺物等
32	西畦原第2・2次	児湯郡新富町	陥し穴2	細石器
33	西畦原第2・3次	児湯郡新富町	陥し穴2	細石器
34	東畦原第1・2次	児湯郡新富町	陥し穴1	細石器・石鏃?
35	東畦原第1・4次	児湯郡新富町		石鏃
36	勘大寺・2次	児湯郡新富町	陥し穴1	
37	小判屋敷	西都市		神子柴型石斧
38	別府原	西都市	陥し穴3・炉穴1?	隆帯文・水迫岩本
39	都於郡城	西都市		石斧
40	隠山	宮崎市佐土原町	集石遺構6?	爪形文・円孔文?
41	野地	宮崎市佐土原町		尖頭器?
42	上ノ原	宮崎市佐土原町	陥し穴1	細石器
43	堂地西	宮崎市	集石3	隆帯文・爪形文・岩本・石斧・石鏃・細石器
44	車坂第2	宮崎市		水迫
45	山下第1	宮崎市		水迫岩本
46	椎屋形第1	宮崎市	集石2	隆帯文・爪形文・貝殻押圧文・石鏃・丸ノミ型石斧
47	椎屋形第2	宮崎市		隆帯文・爪形文
48	上の原	宮崎市		爪形文・水迫岩本・尖頭器?
49	須田木	宮崎市清武町		岩本・細石器
50	清武上猪ノ原・第1	宮崎市清武町	集石1	隆線文・隆帯文・貝殻押圧文・水迫岩本
51	清武上猪ノ原・第2	宮崎市清武町	集石2	隆帯文・爪形文・尖頭器・石鏃
52	清武上猪ノ原・第4	宮崎市清武町		隆帯文・細石器・石鏃
53	清武上猪ノ原・第5	宮崎市清武町	竪穴住居14・集石2・土坑19・炉状遺構2・土坑群?	隆線文・隆帯文・貝殻押圧文・無文・岩本・細石器・石鏃・尖頭器・丸ノミ型石斧・矢柄研磨器・ミニチュア土器・土製有孔円盤・丹塗り土器・安山岩使用
54	白ヶ野第2・3	宮崎市清武町		爪形文・細石器・神子柴型石斧
55	滑川第1	宮崎市清武町		爪形文・岩本・細石器?
56	滑川第3	宮崎市清武町	集石1・陥し穴状遺構?2	
57	山田第1	宮崎市清武町		爪形文・無文・石鏃?
58	山田第2	宮崎市清武町		爪形文
59	坂元	宮崎市清武町	集石1	水迫岩本・有舌尖頭器
60	下猪ノ原・第2地区	宮崎市清武町		隆帯文
61	上の原第1・B地区	宮崎市清武町		隆帯文?
62	杉木原	宮崎市清武町		隆帯文・爪形文・岩本
63	岡第4	宮崎市清武町		隆帯文
64	札ノ元	宮崎市田野町		尖頭器
65	芳ヶ迫第1	宮崎市田野町		岩本
66	芳ヶ迫第3	宮崎市田野町		爪形文
67	井手ノ尾	宮崎市田野町		爪形文・水迫岩本・尖頭器
68	元野河内	宮崎市田野町		隆帯文・爪形文・尖頭器
69	青木	宮崎市田野町		隆帯文
70	黒草第2	宮崎市田野町		隆帯文・岩本・細石器
71	七野第4	宮崎市田野町		隆帯文
72	砂田	宮崎市田野町		隆帯文・爪形文・水迫岩本
73	天神河内第1	宮崎市田野町		隆帯文・神子柴型石斧
74	茶屋原	宮崎市高岡町		爪形文
75	小平谷第1	東諸県郡綾町		隆帯文
76	木脇	東諸県郡国富町		隆帯文・貝殻押圧文
77	塚原	東諸県郡国富町	集石2・石列1?・石器埋納遺構1	隆帯文・爪形文・細石器・石鏃・丸ノミ型石斧・刺突文・釣鐘型土製品・丹塗り土器
78	内屋敷	小林市	配石遺構3?	岩本
79	堀浦	えびの市		丸ノミ型石斧
80	雀ヶ野第3	都城市高城町		細石器・有舌尖頭器
81	堂山・南地区	都城市		隆帯文
82	水上第2	都城市		無文
83	王子山	都城市山之口町	竪穴状遺構4・土坑10・炉穴30・集石遺構6?・配石遺構8	隆帯文・貝殻押圧文・爪形文・細石器・石鏃・土製有孔円盤・石鏃型石製品・軽石製石製品
84	軍人原	都城市高城町		無文・細石器
85	川原谷出水	都城市		隆帯文・無文?
86	大平	串間市		隆帯文
87	三幸ヶ野第2	串間市	集石2・土坑1・配石遺構?	隆帯文・爪形文
88	西ノ園	串間市		隆帯文